The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	とりたて詞「も」のスコープをめぐって
Author(s)	榎原, 実香
Citation	日本語・日本文化研究. 2015, 25, p. 102-111
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54502
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

とりたて詞「も」のスコープをめぐって

榎原　実香

1.　はじめに

現代日本語のとりたて詞とは、文中の様々な要素－これを自者と呼ぶことにする－をとりたて、これに対する他の要素－これを他者と呼ぶことにする－との論理的関係を示す語である（沼田 1986:108）。その中でも代表的な「も」に関する研究は数多く行われているが、本稿では、「も[1]」の文中におけるとりたて機能に着目し、「も」の位置と「も」が影響を及ぼす範囲の関係を明らかにすることを目的とする。そこで、本稿では沼田（1984, 1986, 2008, 2009）、沼田・徐（1995）などによるスコープ研究をもとにデータを観察し、主に沼田・徐（1995）の提唱するような「スコープ」に関して、統語的な考察を試みる。

1)　とりたてのスコープとは、とりたて詞が文中で意味的に影響を及ぼし得る最大の領域で、当該のとりたて詞によって、他と範列的な対立関係をなすと捉えられる、文中の範囲である。とりたてのスコープは、とりたて詞の分布及び文脈等の情報による、統語論的側面と語用論的側面の両方から規定されるものである。（沼田・徐 1995:177）

2.　先行研究

2.1 沼田のスコープ研究

沼田（1986）等は、とりたて詞の位置とその意味が作用する範囲の関係から、スコープ[2]が3種類存在することを示し、それぞれ、N スコープ、B スコープ、F スコープと分類した。N スコープとは、とりたて詞の直前にある要素の集合をスコープとするものであり、B スコープとは、とりたて詞が付加された要素とそれに後続する要素がスコープに含まれるもの、F スコープは、スコープとは離れたところにとりたて詞が位置するものである。沼田・徐（1995）、沼田（2008）では、「も」のスコープに関するデータをさらに分析し、以下のように結論付けた。

2)　「も」のスコープは「も」を含む最小の文の中の述語を中心とした範囲で、文境界を越えることはない。また、「も」の位置は、基本的にとりたてのスコープの先頭要素か最終要素を表示する。述語に後接する「も」は、スコープの末端を示し、スコープの先端は、文脈等の語用論的情報から決定される。述語より前にある「も」は、先頭要素に後接し、スコープの先端を示す。この時のスコープの末端は、その要素を含む文の述語である。（沼田・徐 1995:178）

(2)の沼田・徐（1995）の主張は、「も」とそのスコープに関して客観的観察から得られた事実を記述したものにすぎず、「も」がどこに位置すればどこまでをスコープとすることができるかという「も」のスコープの条件を述べているのではない。先頭、最終という線条的な視点からしか「も」のスコープを分析できていないこと、また、なぜとりたて詞の位置がスコープの先頭要素・最終要素となるのか考察されていないことが本稿の問題の出発点である。また以下は、「も」が「最小の文」内のスコープの「最終要素」に付加しているにも関わらず、実際には容認度が低い例である。沼田の結論は、その理由を説明するのに十分ではないと考えられる。（<>はスコープとなりうる範囲を示す。）

3) ??<花子が昨日ビールを買い>、<太郎が今日部屋を掃除し>もした。
4) *<花子が通販で洗濯機を>買い、<太郎が電気屋で掃除機>も買った。

本稿は、沼田（1986）の 3 種類のスコープ関係をもとに、統語論、特に生成文法の視点から、これらの「も」の位置と「も」のスコープの関係を一般化することを目的とする。

2.2 生成文法における作用域

生成文法における作用域 (scope) とは、「数量詞 (quantifier) や wh 語をはじめとする論理演算子 (logical operator) の作用が及びうる領域（原口・中村(編)1992:420）」、つまり、数量詞・wh 語などの要素が意味的な影響を及ぼす範囲のことである。また、「ある言語表現の意味の作用する領域（スコープ）はその姉妹とその下に位置する言語要素[3]（遠藤2014:15）」であるとあるように、作用域は、文の階層構造をもって決定される。沼田等の提唱するとりたての「スコープ」とは定義が異なるが、「も」も一種の量化詞であるため作用域をもつということが、青柳（2006, 2008）等で主張されている。青柳の主張は「も」の作用域が常に vP（動詞句）全体に及ぶというものであるが、vP の範囲内でしかスコープを捉えられていないことが問題の一つとなる。要素の生起位置の違いによる容認性の差なども考慮した上で、データを生成文法の視点からも再検討することが必要だと思われる。次節より、現代日本語の「も」がどのような「スコープ」をとりうるのか、沼田（1986）、沼田・徐（1995）の例・考察をもとに分析する。

3. 考察

本稿では、沼田（1986）のデータ観察をもとに、筆者の作例を加え、「も」のスコープが生成文法における顕在的な階層構造をもって統一的に説明できることを示す。沼田・徐（1995）等の「スコープ」の概念を用いながら、「も」が意味的に作用する範囲が統語的に説明できることを示す。沼田（1986）で提唱されている N スコープ、B スコープ、F スコープを種類ごとに考察する。

3.1 Nスコープ

沼田が N スコープとして挙げているものは、「も」が付加されている句と、「も」が含意している要素の集合とが一致することを示す。それぞれ順に、主語の名詞句、目的語の名詞句、動詞句がスコープとなる。

5) <花子>が学校に行く、そして<太郎>も学校に行く。（沼田 1986:144）
6) 選手については、<脚力の強弱>を知っておくこと、<特徴>も知らねばならない。
7) 花子は<太郎に電話をかけ>、<次郎に手紙をよこし>もした。（沼田 1986:146）

沼田（1986）によると、名詞句のとりたては [……＜NP＞T^4……Pred] のように、文（動詞句）のとりたては [＜NP……＜NP……＜NP＜Pred＞＞＞T] のように表示できる。これらの「も」の位置とスコープ関係を樹形図（図 1）で示すと、以下のようになる。付加される「も」はそれぞれ四角で囲み、その「も」が影響を及ぼすと考えられる範囲（スコープ）はそれぞれ点線円で示している。

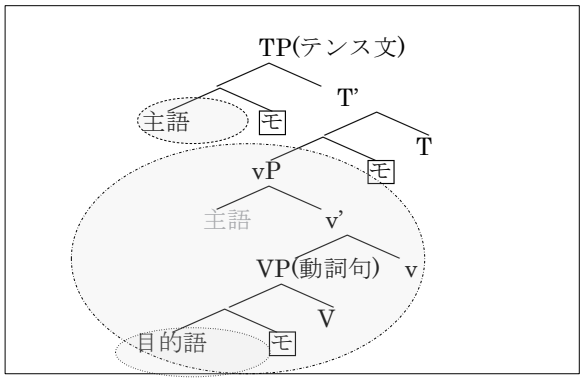

図 1

本稿では青柳（2006）にならい、「も」は最大投射の上に付加構造をもつ付加詞であるとしている。生成文法の枠組みで考察すると、これらは「も」という要素の c-統御内がスコープとなりうることが示された。しかしながら、この沼田（1986）の「も」が付加されている(5)の主語、(6)の目的語は、厳密には「も」が「文中で意味的に影響を及ぼし得る最大の領域」ではない。次の例は(5)(6)とそれぞれ同様の要素をもつデータであるが、文脈・前提となるものが変われば、「も」が付加された要素だけでなく、それに後続する要素もスコープに含めることができる。つまり同じ文であっても、文脈によって「も」のスコープがさらに広がるということを考慮しなければならない。沼田（1986）の枠組みでは以下は B スコープと同様の構造をもつと考えられるため、これらに関しては 3.2 節でまとめて考察を行いたい。

8) <花子が仕事を始める>、そして<太郎も学校に行く>。
9) 選手については、<脚力の強弱を覚えておくこと>、<特徴も知らねばならない>。

3.2 B スコープ

B スコープは、Kuroda (1965)、青柳（2006）等が扱っている「広い焦点」の一種であると考えられるが、沼田（1986）では意味作用が後方に広がるものだけが扱われている。以下は B スコープ (a) と N スコープ (b) が同義解釈されうる例であるが、沼田（1986）では、B スコープの方が N スコープより自然な場合が多いと述べている。

10) a. この木は<花がみごとだ>し、<実も沢山なる>。
    b. この木は<花がみごとだ>し、<実が沢山なり>もする。
11) a. 牛乳と羊の乳は<そのまま飲む>が、<バターやチーズもつくる>。
    b. 牛乳と羊の乳は<そのまま飲む>が、<バターやチーズをつくり>もする。
12) a. 日本語は<発音も難しい>し、<漢字も多い>。
    b. 日本語は<発音が難しく>もあるし、<漢字が多く>もある。
13) a. わたしは日曜日にはいろいろなことをする。<本も読む>し、<手紙も書く>し、<テレビも見る>。だから忙しい。
    b. わたしは日曜日にはいろいろなことをする。<本を読み>もするし、<手紙を書き>もするし、<テレビを見>もする。だから忙しい。

（沼田 1986:148）

沼田 (1986) は、B スコープの構造を [……＜NP *T*……Pred＞] のように記述している。これらをまた樹形図で示すと、図 2 のようになる。「も」そのものと「も」が付加された「句」とが一つの集合体として機能するものを仮に「モ句」と称すると、B スコープはその「モ句」の c-統御内がスコープとなる現象であることがわかる。主語+モで構成される「モ句」は、T'以下を c-統御し、また目的語+モの「モ句」は動詞を示す V を c-統御している。それゆえ、円で囲まれた B スコープとなる範囲は、「も」が付加されている要素、および「モ句」が c-統御する要素の集合を示すことが明らかである。

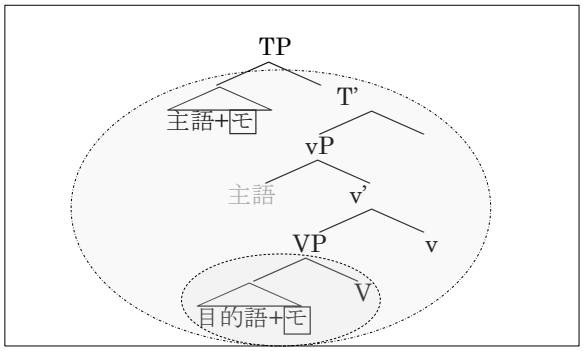

図 2

ところで、「も」が付加する対象は沼田（1986）の示すような名詞句または述語だけではなく、日本語記述文法研究会(編)（2009）にもあるように、「学校へも」や「ゆっくりとも」などの後置詞句や一部の副詞的成分にも付加でき、名詞句などに付加した場合と同様に説明できると予想される。名詞の例も含め、データを追加して考察する。

14) <風が吹いた>。<雨も降るだろう>。
15) <大阪では雨が降っている>。<東京でも空が暗い>。
16) <花子は買い物に出かけた>。<次郎も部屋の掃除をし始めた>。
17) <昨日台風が来た>。<今日も雷が鳴っている>。<明日も大雨になるらしい>。
18) a. *<花子が通販で洗濯機を>買い、<太郎が電気屋で掃除機>も買った。（=(4)）
b. <花子が通販で洗濯機を>買い、<掃除機も、太郎が電気屋で>買った。
19) a. 私は<[塾で[太郎に本を貸し]]>、<[学校でも[次郎にノートを写させ]]>てあげた。
b. *私は<[塾で[太郎に本を貸し]]>、<[学校で[次郎にノートも写させ]]>てあげた。
20) a. *<[母は[息子に夕食の支度をお願い]した]>。<[（母は）[娘に牛乳も買ってきてほしいと頼ん]だ]>。
b. <[母は[息子に夕食の支度をお願い]した]>。<[牛乳も$_i$]、[母は[娘に t_i 買ってきてほしいと頼ん]だ]>。

生成文法、特に Luigi Rizzi 等の Cartography を援用すると、文頭のモ句はそれぞれテンス文の主語位置、かき混ぜ句の位置にある要素に「も」が付加しているものであるため、TP（テンス文）指定部、または FocP（焦点句）指定部に位置すると考えられる。いずれも、「も」が階層構造上比較的高い位置に存在し、テンスを含め文全体がモ句の c-統御範囲となって、文中の要素全体に影響を及ぼすことができる。N スコープよりも B スコープがよく用いられるというのも、統語的にスコープが広がることによって表現できる範囲が広がるからだと考えられる。また、(10)-(13)がそれぞれ同じ意味になるというのも、統語上の両

作用域が重なるからだという説明ができるだろう。以上より、モ句が c-統御する範囲は沼田の「スコープ」と一致させることができるということが予想される。

3.3 F スコープ

沼田（1986）によると、以下(21a)の F スコープは、「も」と離れてスコープが位置するものである。F スコープに関して沼田（1986）は、「だけ」「ばかり」などには割合見られるが、「も」「さえ」などには少ないと述べている。

21) a. 太郎は<ピアノ>を弾く上に、<バイオリン>を弾きもする。
　b. 太郎は<ピアノ>を弾く上に、<バイオリン>も弾く。　　（沼田 1986:150）
22) a. 太郎は<トランペットを吹く>上に、<バイオリンを弾き>もする。
　b. 太郎は<トランペットを吹く>上に、<バイオリンも弾く>。
23) a. 太郎は<ピアノを弾く>上に、<トランペットを吹き>もする。
　b. 太郎は<ピアノを弾く>上に、<トランペットも吹く>。

(21)の例は、［ ……＜NP＞……Pred *T* ］と表されるが、これも厳密には「も」が「文中で意味的に影響を及ぼし得る最大の領域」ではないと考えたい。(21)と(22)、(23)を見比べると、どれも構造的には同じであり、(21)が他と異なるのは、「弾く」という動詞が 2 度使われているという点だけなのである。F スコープとして挙げられているものを図 3 のように示すと、小さな実線円の中の目的語は、動詞句 VP の中の一要素である。B スコープで示した「モ句」の c-統御範囲を大きな点線円で図示すると、実線円は点線円の中に完全に含まれる。

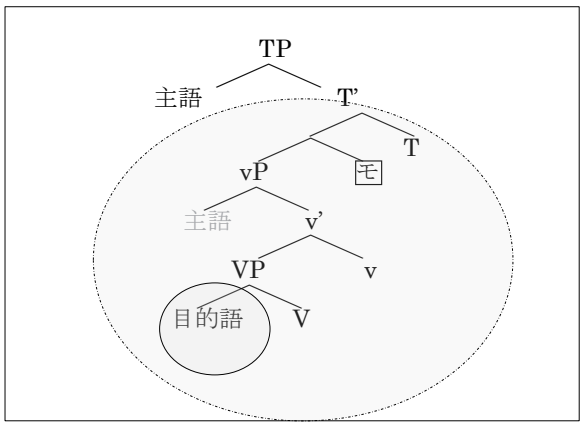

図 3

つまり、点線円のように、F スコープの実際のスコープは N スコープ（または B スコープ）が及ぼす範囲と同じであり、「も」のとりたて機能によってすでに動詞までの意味は含まれていると考えることもできる。スコープ内で含意されている要素とたまたま同一形態の要素が(21)で使用されているだけだとすると、同じ語が重複して現れるということになるため、F スコープは実際にはあまり使用されないのではないかと考えられる。

3.4 結論

以上 N スコープ、B スコープ、F スコープの分析から、沼田（1986）の「B スコープ」を沼田・徐（1995）における典型的な「も」の「スコープ」であるとすると、次のような一般化が考えられる。

24) 「も」のスコープは、「モ句」の顕在的な c-統御範囲である。

また、沼田・徐（1995）はさらに、「も」の位置が異なったときに文の解釈が同じになるものと解釈が異なるものに分けて、スコープの範囲を考察している。沼田・徐（1995）は、「も」が連体文より外側に生起するか内側に生起するかによって文の意味が変わるというデータを考察し、スコープが入りうる要素の最大の範囲は大体連体文中に入る可能性のある要素の集合であると述べているが、このような現象もまた、文の階層構造を設定すると説明可能である。

・同義解釈不可の例[5]

25) a. [<[[父が卒業した]学校]>も受験する]。そして、祖父が卒業した学校も受験する。
　b. [[[<父>も卒業した] 学校] を受験する]。

26) a. [<[[英語を研究する]人]>も採用する]。
　b. [[[<英語>も研究する] 人] を採用する]。

27) a. [<[太郎に会える]と>も思わなかった]。
　b. [[[<太郎>にも会える]と思わなかった]。

28) a. [<[[A 社が参加する]見込み]>もない]。
　b. [[[<A 社>も参加する]見込み]がない]。　（沼田・徐 1995:179）

29) a. <[[太郎が犯人の]ようでもある]>。次郎と太郎、どちらが真犯人だろうか。
　b. [[<太郎>も犯人の]ようだ]。
　c. [<太郎>も[[(太郎が)犯人の]ようだ]。

30) a. <[[花子を採用する]べきでもある]>。太郎と花子、いったいどちらを採用しようか。
　b. [[<花子>も採用する]べきだ]。
　c. [<花子>も[[(花子を)採用する]べきだ]。

31) a. 被害者は<顔を殴られ>もしたようだ。
b. 被害者は<顔を殴られたようで>もある。
→c. *被害者は腕もそうだが、<顔を殴られ>もしたようだ。
被害者は、いったいどちらを殴られたのだろうか。
→d. 被害者は腕もそうだが、<顔を殴られたようで>もある。
被害者は、いったいどちらを殴られたのだろうか。 （沼田・徐 1995:182）
e. 被害者も顔を殴られたようだ。
f. 被害者は顔も殴られたようだ。

(31)を例に、「ようだ」に後接する「も」(31b)と他「ようだ」節の内部に位置する「も」との関係を樹形図で表すと、図 4 のようになる。「ようだ」節の中は動詞のル形・タ形どちらも生じさせることができることから、三原（2015）にならい、「ようだ」に後接する「も」が最大範疇（FinP=定形テンス文）の付加構造の位置にあると仮定する。主語+モ(31e)、動詞句+モ(31a)、目的語+モ(31f)のそれぞれの「も」の意味が作用し得る範囲は、点線円で覆われた各モ句の c-統御範囲である。モダリティ要素に後続する「も」のスコープ（実線）とその他の要素に付加する「も」のスコープ（破線）とでは、それぞれスコープの大きさが異なる。このスコープの範囲の位置や大きさの差異こそ、「も」のスコープの意味的差異を生み出す要因なのではないかと考えられる。他の例であっても、連体文・モダリティ要素等の外に付くものとその中に付くものでは、意味的なスコープ範囲が異なることが、確認できる。

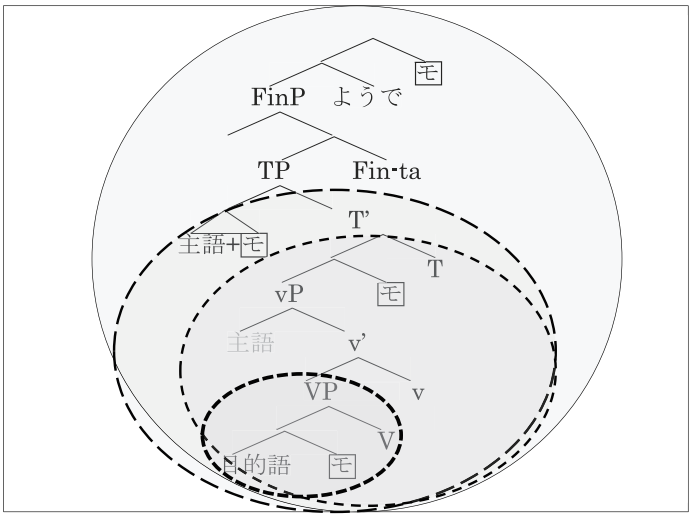

図 4

4.　まとめ

上記の考察より、とりたて詞「も」のスコープは文の階層構造上の位置により決定されることが明らかとなった。沼田（2008）等も、とりたての作用域は文脈等からの情報を参照し決定されるものであるとしているが、データをもって線条的に記述されている沼田のスコープと、生成文法で考えられている作用域とは、顕在的な階層構造を想定すると関連性の高いものであることが明らかになった。本稿では沼田の例を主に取り扱ったが、今後様々な例を検討し「も」のスコープが語順よりも階層構造の関係によって定まるということを確認していきたい。以上より、「も」のスコープを統語的な側面から扱う必要性がデータで明らかになった。本稿では取り扱わなかった「も」のフォーカス、つまり実際にどの範囲の要素が含意対象となるかについて、統語的側面から言えることも追求し、さらに考察を進めていきたい。

〈参考文献〉

青柳宏（2006）『日本語の助詞と機能範疇』ひつじ書房.

青柳宏（2008）「とりたて詞の形態的，統語的，意味的ふるまいについてー係助詞，副助詞という分類の有意性を中心にー」日本語文法学会(編)『日本語文法』8-2, pp.37-53, くろしお出版.

遠藤喜雄（2014）『日本語カートグラフィー序説』ひつじ書房.

奥津敬一郎（1974）『生成日本文法論』大修館書店.

澤田美恵子（2007）『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版.

寺村秀夫（1981）「ムードの形式と意味(3) ー取立て助詞についてー」『文芸言語研究言語篇』6, pp.53-67, 筑波大学文芸・言語学系.

寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版.

日本語記述文法研究会(編)（2009）『現代日本語文法 5 第 9 部 とりたて・第 10 部 主題』くろしお出版.

沼田善子（1984）「とりたて詞の意味と文法ーモ、ダケ、サエを例としてー」『日本語学』3-4, pp.79-89, 明治書院.

沼田善子（1986）「第２章とりたて詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』pp.105-225, 凡人社.

沼田善子（2000）「（第３章）とりたて」金水敏・工藤真由美・沼田善子(共著)『日本語の文法２　時・否定と取り立て』pp.151-216, 岩波書店.

沼田善子（2008）「とりたて詞の分布と意味をめぐってー「も」と「だけ」の記述を例にー」日本語文法学会(編)『日本語文法』8-2, pp.20-36, くろしお出版.

沼田善子（2009）『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房.

沼田善子・徐建敏（1995）「とりたて詞「も」のフォーカスとスコープ」益岡隆志・野田尚史・沼田善子(編)『日本語の主題と取り立て』pp.175-207, くろしお出版.

原口庄輔・中村捷(編)（1992）『チョムスキー理論辞典』研究社出版.

南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店.

南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.

三原健一（2015）『日本語の活用現象』ひつじ書房.

山田孝雄（1908）『日本文法論』宝文社.

山田孝雄（1922）『日本口語法講義』宝文社.

Kuroda, S.-Y. (1965 [1979]) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*. Doctoral dissertation, MIT. Reprinted, New York: Garland Press, 1979.

May, Robert (1977 [1991]) *The Grammar of Quantification.* Unpublished Doctoral dissertation, MIT. Reprinted, New York: Garland Press, 1991.

Rizzi, Luigi (1997) The Fine Structure of the Left Periphery. In Liliane, Haegeman (ed.) *Elements of Grammar: Handbook in Generative Grammar*, pp.281-337, Dordrecht: Kluwer.

Rizzi, Luigi (2004) Locality and Left Periphery. In Adriana Belleti (ed.) *Structures and Beyond: The Cartography of the Syntactic Structures*, pp.223-251, New York: Oxford University Press.

---

[1] 本稿で扱う「も」は、分析の特徴上沼田（1986）等における「単純他者肯定」の「も」、つまり「累加」の意味をもつものを対象とし、いわゆる「ぼかし」の「も」などは本考察の対象としない。

[2] 沼田（1986）で扱われている「スコープ」は、沼田・徐（1995）、沼田（2009）等では「焦点（フォーカス）」のことであるが、沼田（1986）はデータについての記述が詳細であるため、沼田（1986）の用語・データをそのまま援用し、分析を進めていく中で沼田・徐（1995）の定義と矛盾が生じた場合は、適宜修正を加えている。

[3] つまり、ある要素の作用域はその要素が c-統御する範囲である、ということである。

[4] イタリック体の *T* はとりたて詞を示し、テンスを示す T とは異なることに注意されたい。

[5] 筆者はこのような同義解釈が不可能な例の中にも、同義解釈が可能となる例が存在すると考えているが、それについて、沼田・徐（1995）は以下のように述べている。

> b.文は、「も」の後に読点を打って読んだり、先行の名詞句に卓立をおき、「も」の後にポーズを入れて言ったりすると、a.文と論理的意味が同義に解釈できるようになる。（中略）しかし、これは b.文の構造が変わったのであり、補文中の「も」が主文の名詞句をフォーカスとするわけではない。
>
> （沼田・徐 1995:180）

ここで沼田・徐（1995）の述べた「構造が変わった」というのは、生成文法の視点からも「要素がより高い位置に移動した」と考えることができる。その「も」の「移動先」については、今後の課題としたい。